
月は見ている

赤田サチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月は見ている

【Zコード】

Z9086C

【作者名】

赤田サチ

【あらすじ】

ふと窓の外を見ると、夜空に存在するまんまるい月。その月を見て何か想う蘭。　ねえ、私はあとどの位待てばいいのかな……？

昼間は依頼人の訪問やら小五郎のヨーロちゃんホールやらで何かと騒がしい毛利探偵事務所も、比較的静かな今は夜。

三階に設けられた自宅の一室の壁にかけられたシンプルなカレンダー。所々小さな文字で何か書き込まれている。恐らく依頼人との約束が大半であろう。

その何の変哲もないカレンダーを丁寧にめくる髪の長い少女の姿があった。言わずもがな、ここに住人、毛利蘭である。蘭は何か神妙な面持ちでカレンダーを見つめていた。

「（ねえ、新一……。あなたが私の前から姿を消してからもうこんなに経つんだね……。時間はあなたをずっと見てきてる。いつになつたら戻つてくるのかな……。あと何枚、このカレンダーを破れば帰つてくるのかな……。私はこのまま我慢して待てるのかな？）」

蘭はそつとカレンダーを元の状態に戻し、窓側に寄ると、鍵に手をかけ、ロックを解除し、窓を全開にした。

「……月だ」

蘭は窓から少し身を乗り出し、空を見上げた。まるで満月が蘭を見つめていた。

「（時々不安になるんだよ。新一がもつ戻つてこないんじゃないか……つて。信じてないわけじゃない……。直接ではないけれど、『待つてほしい』つて、そう言わされて嬉しかった。単なる幼なじみだけれど、堂々と待つていいんだって、嬉しかったんだ。……でもね、こんなにも会えないと、悲しくて、寂しくて、心配で……）」

そう思つた蘭の冷えた頬には、涙が流れていた。その涙は、彼女の心までも濡らした。

「蘭姉ちゃん？」

「コナン君……」

風呂から上がつたコナンは頭にタオルを被つて、蘭の名前を不思議そうに呼んだ。その様子を見た蘭は、慌てて涙を拭つた。

「そんなとこにこいたら、風邪ひっちゃう……」

“よ”まで言いかけた時、蘭に呼ばれて言葉を遮られた。

「コナン君、来て。満月だよ」

そつまつとコナンを自分のいる窓の方に招いた。

「……綺麗でしょう？　コナン君、よく見える？　私が抱っこしてあ

「……どうが？」

蘭はそう言つとコナンを抱き上げた。一方のコナンはといつと、恥ずかしいのか顔を真つ赤にさせて、足をジタバタさせていた。

「ほ、僕はいいよ！ 蘭姉ちゃん……」

「遠慮しないで、コナン君。私、空手やつてるから結構力持ちなのよ」

そう言いながらウイークする蘭に『結構かよ……大分の間違いだろ……』と心中で突っ込みを入れたのも束の間、蘭はコナンに話し掛けているのかいないのか、まるで独り言のように呟いた。

「……お月様はいいね。いつも新一を見守つていられるんだもの。新一が何処にいるのか、今何してるのか、どんな表情をしているのか、全部わかつちゃう」

「蘭姉ちゃん……」

先程のおどけた様子とは打つて変わつた蘭の寂しげな表情に、コナンは自らの顔をも寂しげに変えた。

「ねえ、コナン君。新一も見てるかな……この月を」

「（蘭……）」

「……うう……だね」

下を向いたまま返事を返す「ナン」。

「ちゃんと戻つてくれるよね？信じていいんだよね、あの言葉……」

『蘭に待つてほしいんだ』

「大丈夫だよ、蘭姉ちゃん……。新一兄ちゃんは何があつてもちゃんと約束を守る人だよっ！だから……だから信じてほしい」

そう言葉を発した「ナン」の瞳は、蒼く輝き、納得させられる力強さがあった。

「せうでしょ？ 蘭姉ちゃん？」

抱きかかえられたままの口ナンは、蘭の顔を見上げ、無邪気に微笑んだ。

「……口ナン君、ありがとう」

蘭はその無邪氣な少年に、心から微笑んだ。

「……おこつ！ 蘭つ！ いい加減窓閉めねえかっ！ 寒いで」

小五郎はテレビを見ながら、蘭に窓を閉めるよう促した。

「 もへ、向ふお父さん。風情も向もないんだから」

口ナンを下ろして、渋々窓を閉めようとする蘭。

「へックショーン」

「やだ口ナン君ー。風邪ひこちやつたつ？ 『めんね……』

慌てて窓を閉め、申し訳なむけつに手を合わせた。

「ひん、平氣だよ。……じやあおやすみ蘭姉ちゃん」

口ナンは蘭にしゃべり、部屋を去つた。

「……おやすみ、口ナン君」

ねえ、新一。私信じてるよ……。何日経とうが、何ヶ月経とうが、何年経とうが、あなたは帰ってくる……って。いつか、ううん……絶対にまたこんな月を一人一緒に見よう。

心の中でそつと誓つ蘭の姿を、月は遠く離れた夜空で優しく穏やかに見つめていた。

(後書き)

ちよつとセンチな蘭ちゃん。どうだつたでしょ「うか?」……私自身、最近よく円を見るんですね。だから思いついて書いてみました。

評価・感想、頂けたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9086c/>

月は見ている

2011年1月24日22時04分発行